満山の紅葉照り映え両子寺

長良子

両子寺のしぐれ紅葉という紅葉

同

日の当る紅葉に見入り立ちつくす

同

両子寺を後に、一行は安岐の谷をまっすぐに下り、三浦梅園の旧宅をたずねる。数々の遺品を拝見し、改めて梅園先生の偉大さに打たれる。縁先のおおきく広くもない庭には、先生の植えられたというしゃくなげの古木が枝をひろげ、さんしゅゆの赤い実が美しい。

梅園の旧居の小菊咲き乱れ

長良子

時刻は四時をすぎた。帰りを急がねばならない。安岐に出て、奈多八幡の海岸の松並木をすぎ　杵築を経て日出町に入り、バスを松屋寺の前にとまる。丈竹、荒金両先生が待ち受けてすぐ案内下さる。

松屋寺は木下侯の菩提寺である。先ず本堂前の天然記念物大蘇鉄に驚く。目は既に鶴見東山の彼方に落ちていたのでやっと写真に収め、境内につづく藩侯の墓所を訪う。すばらしく壮大な五輪塔が、墓地一杯いっぱいに立ち並び、養賢寺の毛利侯の墓所の整然とはしていないが、多やゝ趣を異にする墓地に立ちつくして、感銘ふかく大竹先生のお話を承る。さすがに二万五千石の藩侯の墓所であると親近感を覚えつゝ、最後の見学を終ってバスに乗る。

今日文化の日、一昨年ごろから予定に組み、待ちもうけていた国東半島の文化財を訪うバス旅行、賑やかに楽しく、一、二の方が車に酔うた外異状や事故全くなく、帰りのバスも喧騒しく、別宵、大分と通過、佐伯に帰りついたのは午後八時であった。この大成功の陰には我らが顧問平田先生の指導鞭撻が多々あったことをお礼申し上げて、記録の筆をおくこととする。

（終）

訪問記

宇佐写真館の中村義雄氏を訪ねて

十一月二十三日、午後二時から新道の中村家をお訪ねする。平田顧問をはじめ高木会長外々名で八名、新築の成った床間で大きなテーブルを囲んで中村義雄氏にお話を承る。

先ず話は渡越焼について。確たる渡越焼はどこにあるか、誰が持っているか。どうもはっきりその正体がつかめない。という流を交えて、中村氏は高麗白磁によく似た大きな茶碗を見せて下さる。伝村のものだ。これをきっかけに朝鮮の陶器を陳列ケースから次々に出してくれる。李朝の水差、高麗の徳利、新羅の花瓶、さては宋代の壺と十数点の陶器をいろいろな角度から解説下さる。

特に私が心を惹かれたのは、七、八百年前の絵高麗（下図）すばらしい立体を示す像の美しさ、手に持つのしっとりした手ざわり、程よい空間感、さりげなく描かれた絵が、にじんだような褐色乳白の絵付程よい空間感、さりげなく描かれた絵が、にじんだような褐色乳白の絵付。こうした程度しか鑑賞出来ないが、実はどの品も改めると中村氏はお若いころから精魂を入れて選び、拾んでは愛蔵している由である。今日は特に陶器を中心に見せていただいたが、その外イロハとして、「菩薩の面」「南無仏太子像」「李舟の絵」などが懇切に解説と共に拝見した。

「菩薩の面」は寺院の祭式に用いるもので、はじめて実物を見る機会となった。テレビやグラビアで見たものにくらべて、すばらしい出来である。「南無仏太子像」も初めて拝するもの、中村氏の仏像、彫刻についての深い造詣に打たれる。「李舟の絵」にしても帆足李舟二十二才の作という。書画についても十くれたものと多数愛蔵されておられる。

こうような（今日拝見は所蔵品のほんの一部分）すぐれた芸術作品、古美術品の鑑賞、蒐集、鑑賞、保存管理についてもお話をきいた。到底私共の要求出来ることではないが、よしんば雑に見ても、いつ見てもよい、せめてこのような古美術品につとめて接し、鑑賞の眼を養い、より高雅な芸術を私共の生活の中にとり入れたい。

幸い中村氏は、今後いつでもこのような機会を私共に与えて下さるとのこと、全く厚かいことである。全員衷心から謝意を表しつゝ、三時間以上にわたる訪問を終り　午後五時すぎ辞去した。

（羽柴）